

## 資料2

## 降下物量のデマ

関東・東北地方での放射性物質の降下量は、言うまでもなく福島原発事故後のほうが、大気圏核実験時代よりも桁違いに多い。福島県のみならず、東京都でも言えることである。しかし、大気圏核実験時代のほうが福島原発事故後よりも多かったかのような言説がネットをはじめとして流布し、いまも誤解があるようだ。しかも、専門家といわれる人にも、行政への助言のなかでこのような誤解を広めている例がある。

中村尚司氏(東北大学名誉教授、文部科学省「放射線量等分布マップの作成等に係る検討会」主査、文部科学省委託「放射線等に関する副読本作成委員会」委員長)は、「東葛6市第1・2回空間放射線量測定結果に基づく見解」(2011年7月8日)<sup>12</sup>のなかで、次のように述べている。

〔東葛6市の〕数値は $1\mu\text{Sv}$ より十分低く、 $0.1\text{--}0.5\mu\text{Sv}$ 程度である。この数値は1を超えている福島県内の高い地点の値より十分低い。1960年代の大気圏核実験が世界中で盛んに行われていた頃の東京近郊で、気象庁が長年に渡って測定してきた $\text{Cs-137}$ の空中放射能濃度は今より1万倍も高かったことを考えると、この数値は心配の必要が無い。」(原文ママ)

原発事故前の時点と比べれば、1960年代の降下物量密度が1万倍高かったのはたしかだが、事故がおこった後では何の意味もなく、誤解を広め行政に悪影響を与えた<sup>13</sup>。セシウム137の $1\text{m}^2$ あたりの月間降下物量は、東京では2011年3月分が $8100\text{Bq}/\text{m}^2$ 、福島県双葉郡では334万 $\text{Bq}/\text{m}^2$ である<sup>14</sup>。事故前の月間降下物量は、 $0.01\text{Bq}/\text{m}^2$ より小さい程度で、大気圏

核実験時代の最大値は $500\text{Bq}/\text{m}^2$ 程度である。したがって、東京においてすら、事故後の降下物量は核実験時代の最高値よりも1桁多い。

前出の中村氏の文章には、3つの問題がある。第一に、事故後の7月に行政への助言として、大気圏核実験時代は「今より1万倍も高かった」と述べているという、基本的事実の誤認である。第二に、 $0.5\mu\text{Sv}$ (毎時)程度の空間線量が観測されているにもかかわらず、降下物量との関係を認識できていない。大気圏核実験時代の降下物量 $500\text{Bq}/\text{m}^2$ 程度では、このような上昇はみられない。第三に、心配の必要がないと根拠なく断言し、専門家の助言の範囲を超えていていることである。

なお、厳密には、中村氏が言及した「空中放射能濃度」は気象研究所が測定してきた月間降下物量とは異なる。大気中の放射能濃度(単位体積の空気あたりの放射能)は高崎 CTBT で測定されてきた<sup>15</sup>。セシウム137は福島事故前には高々ほぼ検出限界の $1\mu\text{Bq}/\text{m}^3$ 程度しか観測されなかったが<sup>16</sup>、3月15~16日には $500\text{万}\mu\text{Bq}/\text{m}^3$ 以上が観測され、その後も平常値より高い値が続いている。

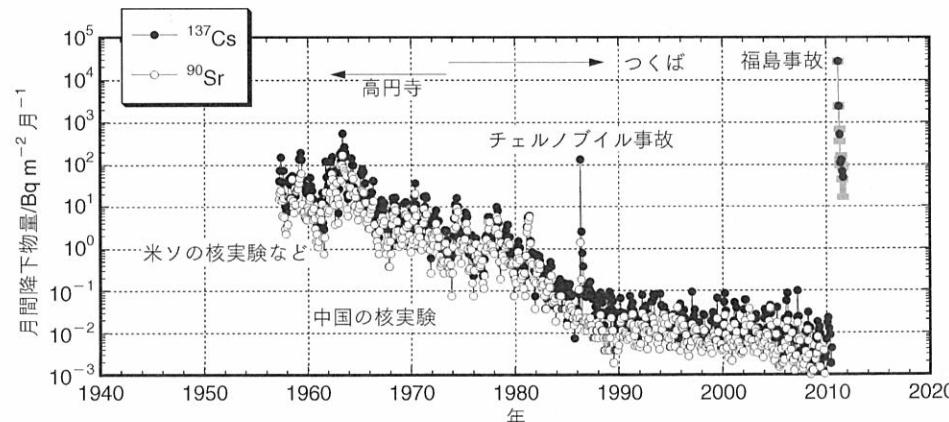
(押川正毅／編集部)

## 参考情報

- 12—[http://www.city.nagareyama.chiba.jp/top/kyogikai\\_kenkai.pdf](http://www.city.nagareyama.chiba.jp/top/kyogikai_kenkai.pdf)
- 13—このような誤った説は中村氏に限らずしばしば目にするが、それが広がったきっかけは『週刊新潮』2011年4月14日号の記事であると思われる。
- 14—[http://radioactivity.mext.go.jp/ja/monitoring\\_by\\_prefecture\\_fallout/2011/12/1060\\_1214\\_teisei2.pdf](http://radioactivity.mext.go.jp/ja/monitoring_by_prefecture_fallout/2011/12/1060_1214_teisei2.pdf)
- 15—[http://www.cpdnp.jp/pdf/120207Takasaki\\_report\\_Feb4.pdf](http://www.cpdnp.jp/pdf/120207Takasaki_report_Feb4.pdf)
- 16—<https://na22.nnsa.doe.gov/prod/researchreview/2011/PAPERS/04-15.PDF>

[本誌3月号 p. 291より再掲載]

## 資料3



気象研究所による $^{90}\text{Sr}$ および $^{137}\text{Cs}$ 月間降下量の経時変化(1957年4月～2011年9月)。気象研究所 地球化学研究部 環境・応用気象研究部: 環境における人工放射能の研究、気象研究所(2011)pp. 128より。本誌4月号 p. 444より再掲載。